

昭和の南海地震体験談

氏名:辻 悦男(つじ えつお)
生年月日:大正13年年8月7日
地震を体験した場所:海南市・自宅2階寝室
当時の家族状況:母、姉、弟、妹



1) 地震発生時の状況

当時22歳で終戦後、兵隊から戻ってきた年で、魚の漁と、のべ網の商売をしていた。自宅2階の寝室で就寝中に揺れを感じ目が覚めた。「地震や」と思ったが、大きな揺れでもないので、布団の中で横になったまま、揺れが収まるのを待った。

2) 津波襲来時の状況

揺れが収まったのもう一度眠ろうと布団から出ないままだった。暫くすると「津波！」という声が聞こえた。地震＝津波という事は昔から伝わり、話を聞いていたので、浜に置いている縄を片付ける為に飛び起きた。前日に縄をねじって入れ物に入れたものを20個程作っており、満潮時の境目の砂浜に上げておいた船の横に置いていた。それらを流されないよう片付けに1人で浜に下り、一生懸命に片付けた。それが終わってから波が来た。まだ夜は明けておらず、暗かったので、はっきりした様子は分からないが、静かに水位が上下していたようだ。船が転覆しないように、繋いでいたロープを石で切っておき、高台になっている自宅近くで様子を見ていた。第3波が来る前から少し明るくなってきて、引き潮で沖の方まで海底が見えた。見た感じでは第3波が一番大きかったと思う。だいたい1回の満ち引きで30分かからない程度だった。港の中は時計回りに潮が流れて回っていた。和歌山市や海南市からの潮の通り道でもあったので、傘の柄やドラム缶などの物がたくさん流れてきていた。

また、近所の人は浜に上げていた持ち船が心配になり見に行ったところ、流されそうになっていたの思わず船に乗ってしまった。潮の流れで港内をぐるぐる回ったそうだが、浜の前にあった家の前を流される時に、船の上から家族に向かって、濡れてはいけない物に注意するように声を掛けていた。3回程声をきいた。

地震時に漁に出ていた人からは、地震の時間帯は西の空が焼けたような赤色だったと聞いた。底引き網を引くとエビが一回で何貫も捕れた、とも言っていた。

3) 家族の行動・被害

自宅が高台にあったので、家族はどこにも避難せず、自宅で待機した。地震の被害も無く、浸水もなかった。

4) 集落・周囲の被害

浜に面した家屋はほとんど床下浸水の被害を受けた。浜から遠ざかるほどに土地が高くなっていくという地形だったので、自宅前の家は床下浸水した。井戸にも水が入り、使えなくなった。人的被害は無かった。



5) 地震・津波後の生活

被災しなかったので、変わらず生活でき、漁もすぐ再開できた。地震前後で変化や不便など、特に気付いた事は無かったように思う。

6) 次の災害への備え

区の避難訓練に参加するようにし、避難経路や避難場所を決めている。実際に沿った形で訓練している。携帯ラジオ等を入れた持ち出し袋を準備している。